



鈴木貴司「大谷風景」(1935) (宇都宮商工会議所蔵)



宇都宮美術館主任学芸員 橋本優子さん

宇都宮美術館主任学芸員で近・現代デザイン史などが専門の橋本優子さんは、大谷の魅力についてこう分析します。

「日本全国に採石産業はたくさんありますが、大谷は現在も採掘を続けており、また地産地消だけではなく全国的に使用されている軟石（凝灰岩）」という点が、大きな特色だと思います。

大谷での石切は明治以前から行われていました。近隣に宇都宮という大きな消費地を持つっており、馬や川舟などの輸送手段も確立されたために、思いのほか広い地域に流通し



大谷の奇岩のひとつ「天狗の投げ石」

大谷石文化と宇都宮の魅力

今年5月24日（木）、文化庁が平成30（2018）年度の日本遺産認定を発表。宇都宮市が申請していた「地下迷宮の秘密を探索旅 大谷石文化が息づくまち宇都宮」が認定されました。今年度は全国から76件もの申請がありましたが、認定されたのはわずか13件でした。

今回の認定は、宇都宮が誇る大谷石文化

大谷石の産地・宇都宮では、石を『ほる』文化、掘り出された石を変幻自在に使いこなす文化が連綿と受け継がれ、この地を訪れる人々を魅了する。」（申請書より引用）

ストーリーの概略は、次のような内容です。

単に保護するのではなく、いかにして地域のために活用するかを重視しており、認定申請の時にはそのための活用策についても具体的な計画を求められます。もちろん直接ビジネスを行う計画はありませんが、地域活性化が成功すればさまざまなビジネスチャンスも生まれてきます。観光関連や飲食関連だけでなく、物販や建築・建設などさまざまな業種にとって、大きなプラス効果が期待できます。日本遺産認定の重要性は、こうした点にもあるのです。

が、日本が守るべき遺産として改めて脚光を浴びたと言えるでしょう。

「地下迷宮の秘密を探索旅 大谷石文化が息づくまち宇都宮」という魅力的なタイトルで、どのような「ストーリー」が語られているのでしょうか。その概要を引用します。

「冷気が張りつめるこの空間は一体、どこまで続き、降りていくのだらう。壁がせり立つ巨大な空間には、柱が整然と並び、灯された明かりと柱の影が幾重にも続く。柱と柱の間を曲がると、同じ光景がまた目前に広がり、しだいに方向感覚が失われていく。

- 産業としての大谷石採掘の歴史や現在の姿
- 採掘したあとに生まれた地下空間
- 大谷石産業を支えた鉄道
- 他地域との関わり（石の出荷、他地域の建物での使用など）
- 採掘などにまつわる地域の習俗
- 大谷石を用いた地域の建造物
- 石蔵や石堀、民芸品など大谷石と人々の生活の関わり

大谷という「大谷地区」や「大谷石」、「フランク・ロイド・ライトと旧帝国ホテル」「採掘跡の地下空間」などがクローズアップされがちですが、産業や文化、習俗、地理的な広がりなどまでを織り込んでいます。「大谷地区」「宇都宮市街地」など3つの地域に分け、38の歴史文化資源を盛り込んでいます。

近代化の中で成長した採石産業

ストーリーに関連して、大谷と大谷石文化の特色や魅力について、改めて見ていきましょう。

宇都宮美術館主任学芸員で近・現代デザイン史などが専門の橋本優子さんは、大谷の魅力についてこう分析します。

「日本全国に採石産業はたくさんありますが、大谷は現在も採掘を続けており、また地産地消だけではなく全国的に使用されている軟石（凝灰岩）」という点が、大きな特色だと思います。

大谷での石切は明治以前から行われていました。近隣に宇都宮という大きな消費地を持つっており、馬や川舟などの輸送手段も確立されたために、思いのほか広い地域に流通し

ました。また、大谷は里にありますから、採石産業と農業とが非常に近かったのです。農閑期に石工として働いていた人も多かったでしょう」

里山に石切場があることが、現在の大谷の景観の特徴を形成していると、橋本さんは言います。

「奇岩や森など自然の様相と、石を掘ったことで生み出された断崖・絶壁などの眺望。そして里の田園風景が一体となって、現在の大谷の景観が誕生しています」

この景観は私たち現代人の目を楽しませてくれるだけではなく、近代日本に生きた人々も稀有な景観として称賛してきました。明治31（1898）年に発行された宇都宮紹介冊子『宇都宮繁盛記』（春圃居士著）には「大谷山奇景の一」と題した写真が掲載され、当時から大谷の風物は広く知られていたことが分かります。

ちなみにこの年の前年、明治30（1897）年には宇都宮と大谷を結ぶ軌道（線路の上を人力で客車と貨車を移動させる交通機関）が整備されています。交通・輸送手段の近代化は、大谷石産業にとっても大谷石文化にとっても、大きく飛躍するきっかけとな

歴史的・文化的な価値の高い文物を守るための施策の二に、文化財制度があります。私たちが長い歴史の中で生み出してきた歴史文化資源を保存し、次世代に受け継ぐため

の制度です。国の文化財の他に県や市町村など地方自治体が指定する文化財もあり、多くの人にとってもなじみ深いものでしょう。

文化財には建物や絵画彫刻などを対象とする有形文化財と、民俗・習俗や伝統芸能などを対象とする無形文化財に大別されますが、どちらもそれぞれの歴史文化資源を個別に指定しています。いわば「点」の保護です。これに対して日本遺産は、地域内に点在するさまざまな歴史文化資源を結びつけて「面」での活用や情報発信を行います。つまり、保護に重点を置いた文化財制度に対して、日本遺産は地域の持つ歴史や文化の重みを内外に発信し、地域活性化につなげようという違いがあるのです（図1参照）。

地域の歴史的魅力や特色は、個々の歴史文化資源だけを見ていたのでは、なかなか分かりません。日本遺産では、いくつもの要素を組み合わせることで、魅力や特色をくつきり浮かび上がらせます。その役割を果たすのが「ストーリー」です。

点在する歴史文化資源をただ並べて紹介する、いわば旅行ガイドブックのような方法では、「点」は紹介できても、地域全体の魅力を伝えることはできませんし、理解も深まりません。

日本遺産の「ストーリー」は、テーマを設定して資源を取捨選択した上で、それらがどのようにつながっているのかを明確にします。これによつて、漫然とした歴史散歩、文化財探訪ではなく、より広がりや説得力のある情報発信が可能になるのです。

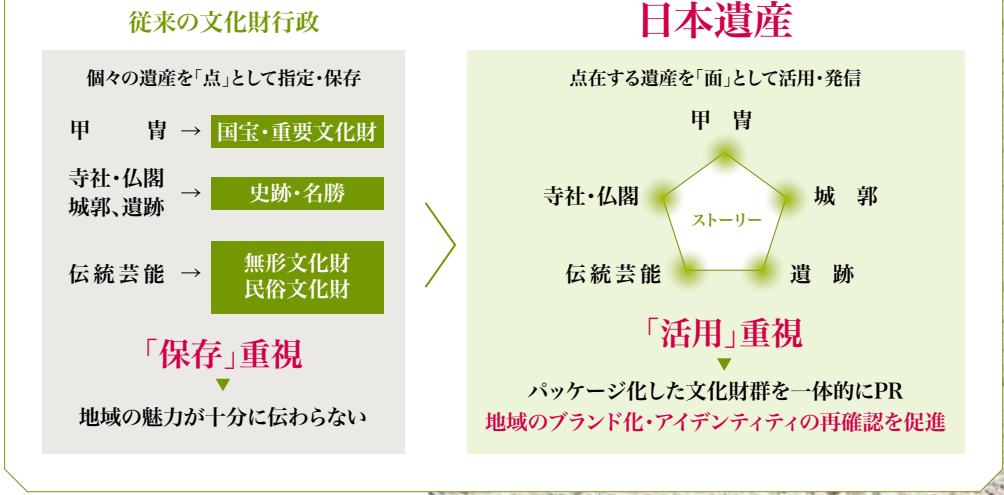
従来の文化財と日本遺産の大きな違いとして、地域活性化への着目が挙げられます。



5月24日、日本遺産認定セレモニーの様子

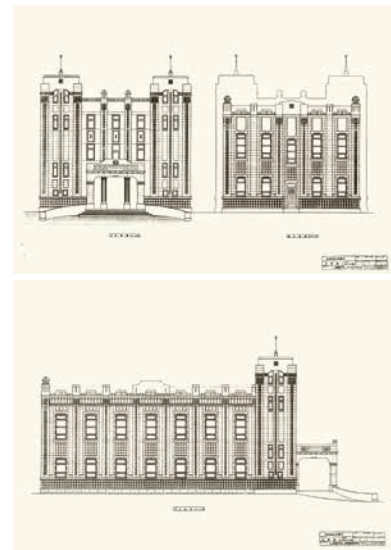


図1／従来の文化保護制度との違い





カネホン採石場（南高橋佑知商店）



旧宇都宮商工会議所復元図面（藤原設計事務所提供）

りました。

また大正から昭和にかけて、現在の大谷景観公園近くの山頂に大谷全体を見渡せる公園「遊楽園」が整備され、訪れた人々の目を楽しませました。

「フランク・ロイド・ライトが旧帝国ホテル・ライト館で大谷石を使ったことで、この石は全国的に有名になりました。明治時代の後半には人と石の輸送用に人車軌道が整備され、石を買い付けに来た人も軌道（客車）で現地に入り、歓待されながら商談が進みました。そういう人たちも、大谷の景観に接して感動したに違いありません。」

宇都宮商工会議所は、当時の石工や大谷の様子を描いた絵画を所蔵しています。洋画家鈴木貫司（1912〜56）が描いた『大谷風景』（1935）です（写真参照）。高い場所に立つて大谷全体を見下ろす石工と、はるか彼方まで広がる田園風景、そしてその中に点在する奇岩や石切場が描かれています。近年「産業観光」という言葉を耳にする

基本構想策定作業と並行して、平成29

（2017）年度からは日本遺産申請のための文化庁との打ち合わせを開始しています。特に、これまで経験のなかった「ストーリー」づくりに力を注いだといいます。

「大谷石文化を選んだことで、ストーリーを構成する素材は豊富にありました。難しかったのは、それらをどう切り取り口でセレクトし、構成していくかということでした」時間をかけてじっくりとテーマ、コンセプトなどを決め、ストーリーを作る作業が積み上げられていきました。

「歴史文化を伝えるだけではなく、地域活性化まで視野に入れなくてはなりません。行きたくなるように、目に浮かぶようにストーリーを作るにはどうしたらいいか、とても苦労しました」

文化課だけではなく、市役所内外のさまざまな人に相談しながら作っていったと、今平主幹は話します。

「大谷石は、宇都宮の人間にとって、当たり前の存在だけに、その魅力や特色に改めて気づいてもらえるものにとしようと考えて



宇都宮市文化課文化財保護グループ（右から今平利幸主幹、齋藤なつの主事、清地良太主任）

斬新だったF・L・ライトの工法

ようになりましたが、戦前の大谷地区は産業の場でもあり、同時に観光の場でもありました。日光が避暑地や名所旧跡をたどるスタイルで観光客を集めたのに対し、大谷は産業の中に観光を内包するスタイルだったと言えるかも知れません。ですから、栃木県は昔からさまざまな観光のあり方が共存していた地域だった———と云つては言い過ぎでしょうか。

大谷石の建築物で代表的なものといえば、何と言ってもアメリカの建築家フランク・ロイド・ライトが手がけた、旧帝国ホテル・ライト館でしょう。今は取り壊され、その一部が博物館明治村（愛知県大山市）に移築・保存されていますが、竣工当時は、大谷石がふんだんに使われ、壮大な威容を誇っていました。

「あの建物は鉄筋コンクリート造で建てられています。コンクリートは固めるために型枠に流し込むのですが、ライトはレンガの型枠に

取り組みました」

『宇都宮市歴史文化基本構想』は今年1月25日に策定。その後たちちに日本遺産の認定申請を行いました。そして5月24日、念願の認定を受けたのです。

とはいえ、それで安心しているわけにはいきませんでした。日本遺産の目的の一つである地域活性化を果たすためには、いくつもの事業を実施する必要があります。認定された日本遺産には文化庁から3年間にわたり補助金が出ますので、それを使っていくつもの事業を実行することが可能ですが、その前に事業の実施主体となる団体を立ち上げる必要があります。

そこで、認定の約1カ月後の6月27日に、宇都宮市や宇都宮商工会議所、城山地区コミュニティ協議会、JR東日本や東武鉄道など官民が参加する「宇都宮市大谷石文化推進協議会」が設立されました。

「地域活性化計画では、目標値として平

青年部が「EXHIBITION IN 大谷」を実施

前号「青年部だより」でもお伝えしましたが、宇都宮商工会議所青年部は大谷地区の観光・産業活性化を目的に、「EXHIBITION IN 大谷」を6月23日（土）に開催しました。大谷地区ならではの商材を知っていただくために大谷公園にブースを出して物販を行った他、大谷石露天掘り採掘場見学のエクスカーションなどを実施しました。

青年部広報DC委員会の高村典宏委員長は「大谷を丸ごとPRするイベントとして、2月頃から準備を始めました。大谷の魅力は資料館、平和観音だけではないことをアピールし、ここに来ないと見られない、手に入れない『大谷ブランド』の発信に務めました」と話していました。



エクスカーションで行われた、大谷石採石体験には、多くの人が参加

問合せ
宇都宮市文化課
☎028-632-2768

大谷石やスクラッチ・タイルを張ることで、構

造と装飾を一体化させたのです」（橋本さん）

目に見える部分にモダンな装飾を施し、内側は鉄筋コンクリートで強度を確保する———この新しい工法により、関東大震災でもほとんど壊れなかったといわれる強度と、当時最先端のデザイン性を両立させたのでした。

「同じ工法で建てられたのが、昭和3（1928）年に竣工した旧宇都宮商工会議所や、昭和7（1932）年のカトリック松が峰教会聖堂です。翌年の昭和8（1933）年に完成した日本聖公会宇都宮聖ヨハネ教会礼拝堂も同様です」

石造りの建物といっても、大谷石は軟石ですから、構造的に高く積むことはできません。まだ数多く残っている古い石蔵のほとんどが2階建てであるのは、それ以上積むことが難しいからです。階高・天井高を上げたり、柱を少なくして空間を広くしたりするためには、鉄筋コンクリート工法が不可欠だったので。

大谷石は加工がしやすいため、建物ばかりでなくさまざまな建造物に使われました。

築堤や道路、土留め、塀、祠などまさに多種多様です。宇都宮市内を少し歩くだけで、数多くの大谷石建造物に出会うことができます。その多くは昔からある工法で造られています。市街地だけではなく、あちこちの集落でも大谷石の活用を見ることができま

す。奇岩や石切場、それに大谷資料館に代表される地下空間など、大谷石を掘ることです。さまざまな新しい魅力が生み出されました。そして掘り出された石は、今も宇都宮の街並みを形作り、市民生活に溶け込んでいます。橋本さんは、今回の認定の価値を次のよう

に表現しました。

「宇都宮市は全国に名立たる石の文化がある街なのですが、そのことが一般的に知られていません。今回の日本遺産認定を契機に、幅広く情報発信をして、多くの人に大谷石文化のすばらしさ、誇らしさに気づいていただけたら、何よりですね。と同時に、歴史的なことを掘り起こし、記録として残すことの重要性にも気づいていただきたいと思っています。建造物は壊されて消えてしまうこともあります。設計図や写真、動画などの記録が残っていれば、私たちの大切な歴史文化が将来の人々に引き継がれます。そして、そこから地域活性化の芽も生まれてくると思います」

2年かけてじっくり練り上げたストーリー

認定申請は宇都宮市文化課が中心になって行われました。同課文化財保護グループの今平利幸主幹によれば、日本遺産の制度ができた時点から申請を考えてはいたものの、いくつかある条件をクリアする必要があったため、申請が今年に入ってからになったそうです。「申請条件のひとつが『歴史文化基本構想』の策定でした。宇都宮市内にどのような歴史文化資源があり、それらをどう地域のために生かしていくかについての方針や考え方を示す構想です。宇都宮市は平成27年の時点ではまだ策定していませんでしたので、こちらを手がける必要がありました」

平成28（2016）年4月に策定作業が開始されました。市役所内部の策定委員会と有識者による策定懇談会が立ち上げられ、何度も会合が開かれ議論を重ねたそうです。

用による活性化に取り組むことになるでしょう。今平主幹らのグループにとっては、まだまだ多忙な日々が続きそうです。

ストーリーを読むと、次のような印象的なフレーズがあります。

「大量の石に恵まれた宇都宮の人々は、長い時の流れの中で、この石に祈りや願いを『彫り』、そして石材として『掘って』きたのだ」「地下の巨大な凹が大きくなればなるほど、石のまち宇都宮の魅力が凸出していく。これから宇都宮の人々は、大谷石と共に暮らしていく」

大谷石文化と宇都宮の関わりを、これからもさらに深めていければ、より素晴らしい街に進化していくことでしょう。